（二〇一八年度）

1　国語問題（六〇分）

（この問題冊子は21ページ、三問である。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
五、**解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

志賀直哉の小説を読んで誰でも容易に気づくのは、いたるところに主人公の「気分」が書かれていることだ。中村光夫は、『暗夜行路』は主人公の気持の中の発展を書いた、という意味のことを作者は云っていますが、事実この位、『主人公の気持』だけが徹頭徹尾書かれている小説もないのです」(『志賀直哉』)と書いているが、むろん『暗夜行路』だけではない。ほとんどすべての作品が徹頭徹尾「主人公の気持」あるいは「気分」でつらぬかれているのである。むしろこういうべきではないだろうか、主人公の「気分」が書かれているのではなく、「気分」が主人公なのだ、と。

1 これは言葉の綾ではない。実際に志賀直哉の小説では、「気分」が主体なのである。そこでは「気分」はたしかに私の「気分」ではあるが、私が所有するものではなく、どこからかやってきて私を強いるものである。こういえば、私小説とは私を書くものでありエゴセントリックで他者を欠如した世界だという2定説に背反するようにみえるかもしれない。だが背反はしない。志賀直哉の世界では明らかに「他者」が欠落しているが、「私」もまた欠落しているので、ただ「気分」がすべてを支配しているというまでである。

私は私小説を史的に考察することに関心がない。すでにそれは多くの論者がやったことだが、私の疑問はたとえば右に述べたような3志賀の特異性が日本の文学・思想風土や彼の生い立ちに還元できないものではないかというところにある。志賀の小説の構造は、私小説を生みだした史的状況にも彼の知的幼児性というような個体史的な事実にも還元することはできない。なぜなら、「気分」が主体であるような「世界」はたえず現存するからであり、志賀の小説は構造的にみればまさにこういう「世界」のみを提示しているのである。

私はいつか、段々に千代を愛するやうになつて行つた。私は不機嫌な時に殊に其事を感じた。不機嫌な時に千代と話をすると、それが直ぐ直る事がよくあつたのである。

(『大津順吉』)

これは主人公が女中の千代を愛し父親の反対で別れさせられるという小説の一節であるが、右のような「愛の自覚」は実に奇妙なものである。話をしていると「不機嫌」が直るから、その女を愛している。これは一見すればふざけた話で、[4]こんなことを平然と書く作家が疑わしく思えるのも当然である。ここにはスタンダールのいう「結晶作用」などはありようがなく、心理小説家なら丹念に描く経過が何もない。つまり、このとき「私」は主体的に愛そうとしているのでもなければ、恋を恋しているのでもなくて、ただ「気分」に従っているのみである。そして、「気分」と彼の判断・選択には一分の遊離もない。

これを、たとえば次のようにも見なすことができる。一つは、この主人公の心性は、機嫌が悪くぐずっていた児がうまくあやされて上機嫌になるのと同じであり、「愛」などというものを彼は知らないのだ、という見方である。愛するためには他者が自己とはっきりと区別された者として意識されていなければならないが、彼の愛は自己愛と対象愛がまだ未分化な段階にある。もう一つ、これと関連していえるのは、志賀の小説の主人公がこのように「気分」で動くのは、他者と自己が未分化な「家」というものの範囲内において、あるいは家族と似たような交友範囲内においてであり、実際志賀はその外に出たことはない、というようなことである。

たぶん右の見方はまちがっていない。一言でいえば、それは[5]志賀直哉の幼児性ということになる。しかし、われわれは心理的な幼児性と思想的な幼児性を、すなわち「心理」と「思想」を混同すべきではない。むろんこのことは明瞭に区別しえないものであって、心理的には幼児性としかいえないものが大概の一級の作家・思想家にあるばかりでなく、そのもっとも本質的な核心が幼児性と切りはなしえないという厄介な事情が存するのである。この厄介な両義性を無視すれば、われわれはたんなる抽象的な観念だけをとりだすか、あるいは個人的な心理学だけをとりだすか、そのいずれかしかできない。そして、[6]いずれも不毛なことだ。

志賀直哉の幼児性を指摘することはたやすいし、サルトルが『ボードレール』でやったような分析をすれば幼児性という刻印をまぬがれる詩人・思想家はめったにいない。結局心理的な観察者には思想が思想たりうる場所が視えないというほかはない。だが、反対に「心理」にすぎないものを「思想」に祭りあげる逆の危険もないわけではない。

『暗夜行路』を恋愛小説と呼んだ小林秀雄は、明らかに志賀の幼児性を「思想」とみなしている。しかし、[7]この反語的な評価を「心理的なもの」から一方的に切りはなして、たとえば「ギリシャ的」とか「原始的」とかいうような理念にまで抽象化することはできない。むろん小林氏もそこまでやってはいない。

中村光夫は次のようにいっている。

……謙作の魅力がその野性あるいは肉体性にあることについては後に述べますが、しかしだからといって、一部の批評家のように[8]謙作を作者が近代人の衰弱に対置した原始人間などと考えるのは、ひいきの引倒しに類するものです。

謙作の肉感性は、さきに述べたようにその生活の抽象性から生れたものであり、人間がこのように抽象的存在になり得るというのは、近代社会を背景としてはじめて可能なことなのです。謙作のように総てを「純粋に俺一人の問題」に還元し、周囲の人間など認めない生活無能力者が、原始社会に生き得るかどうかは考えるまでもありません。こういう「我儘者」などそこには存在を許されませんし、たとえいたにしろ、すぐに餓死か刑死の運命が彼を見舞ったのでしょう。（『志賀直哉』）

私は別に「一部の批評家」のように志賀直哉を理念化しようとは思わない。しかし、それを心理的にみようとも思わない。「気分」が主体となっている志賀直哉の世界は、それ自体として考えるべきものだからだ。それは幼児性でもなければ原始性でもなくて、個体がこの世界に存在するときの根源的な在り方に根ざしている。

志賀において、「気分」が自我主体から独立したもののように存在していることは、次の例をみても明らかである。

自分の調和的な気分は父との関係にも少しづつ働きかけて行つた。然し或時、例へば妻と一緒に上京して電話で祖母を見舞ふと、丁度父が留守だから直ぐ来て呉れと母が云ふ。自分達は電車で直ぐ麻布へ向ふ。そして門を入らうとすると其所に立つて待つてゐた隆子が駈けよつて来て、小声で「お父さんがお帰りになつたのよ」と云ふ。自分達は門を入つただけで誰に

も逢はず、直ぐ引つ返して来る。かう云ふ場合、流石に自分の調和的な気持も一時調子が変る。然し又或る時、人の口から、父が自分の妹達などの事でジリジリと苛立つて気六ケしい事を云ふ噂などを聴くと、父のさういふ気分の根が猶且つ自分との不快にある事を考へずにゐられない点で、そうして今の自分が自分だけで調和的な気分になりかけてゐるのにといふ気のする点で、段々年寄つて行く父の不幸な其気分に心から同情を持つ事もあつた。

（『和解』）

9 自分は父に同情するのではなく、自分と同じく「気分」に強いられて身動きできない父に同情しているのであって、あたかも両者の対立をもたらしているのが「気分」それ自体であるかのようだ。事実『和解』という作品では父と子の対立の原因は何も書かれていない。なぜこの主人公が父に対する「不快」をつのらせて行き、あるいはまた「調和的な気分」になってきたのか、少しもわからないのである。

（柄谷行人『意味という病』）

〈注〉中村光夫（一九一一―一九八八）…評論家、劇作家、小説家。

エゴセントリック…自己中心的。

スタンダールのいう「結晶作用」…フランスの小説家スタンダールの『恋愛論』（一八二二年刊）の中に出てくる言葉で、恋する者が自己の想像や欲望によって、相手を理想化していく作用を意味している。

サルトル（一九〇五―一九八〇）…フランスの哲学者、文学者。『ボードレール』は一九四七年刊。

小林秀雄（一九〇二―一九八三）…評論家。

謙作…『暗夜行路』の主人公、時任謙作。

問一　傍線部1「これは言葉の綾ではない」と筆者が言う理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　主人公の「気分」が中心におかれているのは、『暗夜行路』だけではないから。

b　主人公の「気分」自体が描かれているというよりも、作者の気持の高揚が表象されているから。

c　主人公や「気分」を使った言い回しは、志賀直哉の文体の特徴だけでは説明できないから。

d　主人公と「気分」の関係性は、志賀直哉の小説の本質に関わる問題だから。

問二　傍線部2「定説に背反するようにみえるかもしれない」の文脈に沿った説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　私小説は本来自己を描くものなので、第三者を表現する志賀の小説はいわゆる私小説の考えにそぐわないように思える。

b　私小説は、そもそも自己中心的なものなので、中心のない志賀の小説は私小説の常識に反するように思える。

c　志賀の小説に見られる、私が他者を強制するような作品の構造は、通常の私小説の枠からは外れているように思える。

d　志賀の小説は、自分の外に存在するものに支配されており、私小説の一般的概念とは相容れないように思える。

問三　傍線部3「志賀の特異性が日本の文学・思想風土や彼の生い立ちに還元できないものではないか」と筆者が思う理由は何か、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　志賀が描く世界は、私小説にありがちな、日本独特の文化、考え方や作家の個人史の反映ではなく、古今東西を問わず現実に存在していると考えられるから。

b　志賀が描く世界は、私小説の歴史的変遷、作家個人の環境から説明することは難しく、作品の構造と主題を通してのみ明らかにしていくことができるから。

c　志賀が描く世界は、これまで論じられてきたように、私小説というジャンルが作りあげたものではなく、主体性が曖昧な世界だけを示していると考えられるから。

d　志賀が描く世界は、日本固有の環境、作家の気質にもとづくものではなく、私小説には必ずつきまとう特有の空気を表現したものだと考えられるから。

問四　傍線部4「こんなことを平然と書く作者が疑わしく思える」のはなぜか、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　千代を愛する作者は、積極的でも夢想的でもなく、ただ状況に従っているだけであり、このような人間には信用がおけないから。

b　小説家であれば、愛するという感情の機微を細かく描こうとするのが当然なのに、ここでは、主人公の心情の起伏はまったく描写されていないから。

c　ここで示されている恋愛感情は幼子が感じるようなものであり、家庭的な愛情なので、それをわざわざ取り上げる作者は理解しがたいから。

d　常識的には愛情に結びつかない感情を真の愛のように描こうとするのは、常軌を逸したことであり、作家としてやるべきではないから。

問五　傍線部5「志賀直哉の幼児性」とはどういうことか、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　愛情の方向性が主体・客体どちらに向いているのか明らかではなく、さらに、自他の区別が曖昧な家庭的な環境の中で生きていること。

b　日本的家族社会にあって、自分の機嫌がよくなることを愛情と考え、自分は常に身内によって守られていると自覚すること。

c　他人の感情に構わず、気分によって自己中心的に愛し、友達、家族に対して甘えが許されていると考えること。

d　ナルシシズムと無償の愛を分けて考えることができず、自分がいまだ抜け出ることのできない家庭に拘泥してしまっていること。

問六　傍線部6「いずれも不毛なことだ」と筆者が言う理由は何か、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　心理的な幼児性と思想的な幼児性は区別すべきで、両者を同時に扱うことは結局一面しか見ないことになってしまうから。

b　抽象性は社会の領域で、「心理」は個人の領域であるが、この両領域の曖昧性こそが思想的問題だから。

c　「心理」と「思想」は別のものではあるのだが、ある現象がこの二つの領域を含みもつことに留意すべきだから。

d　幼児的であることは、作家・思想家の複雑な中核を作っており、幼児性の捨象は、現実の不完全な認識につながるから。

問七　傍線部7「この反語的な評価」とは何か、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　『暗夜行路』の恋愛小説的側面は、心理にすぎないと考えること。

b　『暗夜行路』に表われている幼児性を近代人の衰弱と捉えること。

c　『暗夜行路』の評価に、抽象化された幼児性を認めないこと。

d　『暗夜行路』に見られる幼児性に思想の存在を認めること。

問八　傍線部8「謙作を作者が近代人の衰弱に対置した原始人間などと考えるのは、ひいきの引倒しに類するものです」の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　謙作の肉感性は、近代社会が生み出したものなので、彼の自然人としての感性を近代人と対峙させて捉えようとすると、かえって彼の肉感性という価値評価を低めてしまう。

b　謙作は抽象的な存在だと考えることができるので、彼の野性的姿は人間の根源的在り方だとする見方は、謙作に対する正しい評価を間違わせることになる。

c　謙作の魅力である肉体性は近代的自我の一つであり、近代人の過剰な精神性を批判する原始的要素だと見なすのは、一方的な評価を敷衍したものにすぎない。

d　謙作は原始社会を体現しているように思えるが、それは表面的なことで、近代的人間の弱さと比較して考察するのは、牽強付会の評価だと言わざるをえない。

問九　傍線部9「自分は父に同情するのではなく、自分と同じく「気分」に強いられて身動きできない父に同情している」の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　母に気づかう父を理解しながら同感するのではなく、自分と同様に不快によって追い詰められ、気分だけで妹達にまで辛くしている父を憐れんでいる。

b　自分と対立している父に共感するのではなく、歳をとるにつれて徐々に横柄になっていって、若い自分と同様に気分だけで行動している父を憐れんでいる。

c　父の不機嫌の原因を知り、気持を理解しようとするのではなく、自分と同様に、つかみどころのない気分に動かされている父を憐れんでいる。

d　調和的になった自分を理解しようとしない父に同意するのではなく、自分と同様に気分の根本に不快感をもち、それに流され行動せざるをえない父を憐れんでいる。

問十　筆者の主張に合致するものを二つ選べ。

a　志賀の小説における「気分」は主人公に帰属するものではなく、ただそこに在り、主人公の行動を決定するものである。

b　志賀を理念的に捉えようとすることは、作家の幼児性・原初性を無視することであるから、不十分な解釈である。

c　作家や思想家の質を決定するものは、その幼児性が心理的であるか思想的であるかということにかかっている。

d　「気分」が主人公となっている志賀の作品は、人間存在の根源的なありさまを示している。

e　作家の心理を考察すれば、いつの間にか思想的問題とすり替えてしまうという認識の誤謬を犯さざるをえない。

f　志賀の私小説には、結局のところ「気分」は存在するが私は存在せず、他者の営みしか描かれていないと言ってもいい。

二

次の文章は顕昭の著した『袖中抄』「わがなもみなと」の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

おほかたはわがなもみなと漕ぎ出でなむ世をうみへたにみるめ少なし

顕昭云はく、これは古今集第十三恋部歌なり。奥義抄に此歌をば書き出でながら不レ釈レ之。心えがたき歌か。他書にも釈したる事も見えず。されど推し量りに今案ずるに云はく、世を恨みて朝にもつかへずして、山にも入り船にも乗りて避くるをば逃レ名と書けり。その人と言はれて仕ふるに、世をさりぬれば、名も世をのがるる心なり。除籍とて札をけづらるるも、その名を離るるなり。されば除名とも言へり。また名をとどむ、名を折る、名を惜しむなど申すも、名をむねとすることなり。然者この歌は、わが名もみなと漕ぎ出でなむといふは、我が身も名も皆こぎ出でて世を去り失せなむと詠めるなり。みなとを皆に添へたるなり。世をうみへたにとは、海には沖といひ、へたといふことあり。沖は遥かに出でて深き所なり。へたはほとりの浅き所なり。日本紀には海浜と書きてうみへたとよめり。浜と書きてもよめり。辺とも書けり。我が身の憂きを世をうみと添へたり。またわろき身をへたともいふなり。みるめ少なしとは、人にあひ見ぬ心なり。さればうき名をもとどめじと詠めるなり。万葉に云はく、

(Ⅰ)あふみの海へたは人知る沖つ波君をおきては知る人もなし

後撰に云はく、

(Ⅱ)何せむにへたのみるめを思ひけむ沖の玉藻をかづく身にして

〈注〉顕昭…十二～十三世紀の歌人。歌学者。藤原顕輔の猶子(養子)。　奥義抄…顕昭の義兄藤原清輔の歌学書。　逃名…なをのがる。名誉・名声から遠ざかる。　除籍…殿上人が罪を犯した場合、殿上の簡(ふだ)を削除して、昇殿を止める処分。　日本紀…日本書紀。

問一　傍線部1「古今集」について、正しく説明するものを次の中から一つ選べ。

a　古典的な詠み方に加えて、枕詞や序詞など、生命力に満ちた定型的表現に特色が見られるようになった。

b　古典的な詠み方に加えて、掛詞や縁語によって、心情を物との関係で詠むようになった。

c　古典的な詠み方に加えて、古歌や漢詩、物語などを意図的に踏まえた新しい表現が注目されるようになった。

d　古典的な詠み方に加えて、身体的、感覚的、叙景的な表現が多用されるようになった。

問二　傍線部2「心えがたき歌か」はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　自分の好みに合わない歌であったのだろうか。

b　未熟で納得できない内容の歌であったらしい。

c　難解でよくわからない歌だったのであろうか。

d　説明する必要のないわかりやすい歌であったのか。

問三　傍線部3「されど推し量りに今案ずるに」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　用例を検索しないで、感想を述べた。

b　辞典を引かないで、推測に任せた。

c　注釈書がないので、自分で考えた。

d　先学の書きそうなことを推理した。

問四　傍線部4「朝」と同じ意味で使っていないものを、次の中から一つ選べ。

a　朝威
b　朝野
c　朝雲
d　異朝

問五　傍線部5「その人と言はれて」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　他人の指図を受けて。
b　他人の指図を受けずに。
c　他人と交替してほしいと。
d　他人と交替できないと。

問六　傍線部6「名をむねとすることなり」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「名」という言葉がいかに重要な意味を持っているかを語っている。
b　「名」という言葉にはいかに多くの意味が含まれているかを語っている。
c　生きてゆくには「名」を重んじることが大切だということを語っている。
d　この世の中で「名」に拘泥することがいかに無念であるかを語っている。

問七　傍線部7「我が身も名も皆こぎ出でて世を去り失せなむ」とあるが、どのような解釈を行ったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　港から舟を漕ぎ出すことで、私も私の評判も、この世から抹消できたらいいのになあ。

b　舟に乗ってこの国から脱出することで、いやな噂の立っていない所に行ってしまおう。

c　舟を漕ぎ出すように世間から脱出して、私も私の評判もすっかり捨ててしまおう。

d　私の評判を打ち消すには命を捨てるほかに方法はない。いっそ死んでしまいたいなあ。

問八　傍線部8「浜と書きてもよめり」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　日本書紀では「浜」と書いて「へた」と訓む例がある。

b　日本書紀では「浜」と書いて「うみへた」と訓む例がある。

c　「おほかたは」の歌は日本書紀には「浜」と書いて「へた」と訓んでいる。

d　「おほかたは」の歌は日本書紀には「浜」と書いて「うみへた」と訓んでいる。

問九　傍線部9「我が身の憂きを世をうみと添えたり」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「世をうみ」には「海」の語に「我が身の憂き」の「憂」が言い掛けられている。

b　「世をうみ」の「生み」の語と「我が身の憂き」の「憂」や「身」の語とは掛詞である。

c　「我が身の憂き」に「浮き」が掛かり、「憂き世」や「海」と縁語の関係になる。

d　「我が身の憂き」から「憂き身」「憂き世」「世を倦(う)み」へと発想が連鎖している。

問十　傍線部10「わろき身をへたともいふ」とあるが、どのような解釈を行ったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「へた」は海のほとりの意だけではなく、我が身に罪悪感があることを言っている。
b　「へた」は海のほとりの意だけではなく、自分がいかに処世が下手かを言っている。
c　「へた」は海のほとりの意だけではなく、自分が貧乏人であることを言っている。
d　「へた」は海のほとりの意だけではなく、自分の身分が卑しいことを言っている。

問十一　傍線部11「人にあひ見ぬ心なり」とあるが、どのような解釈を行ったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　海藻の「海松布（みるめ）」ではなく、海辺に人目が少ないことを言っている。
b　人目ではなく、海辺に海藻の「海松布」が少ないことを言っている。
c　恋人と逢う機会の意の「見る目」に、海藻の「海松布」を掛けている。
d　世間の人目をいう意の「見る目」に、海藻の「海松布」を掛けている。

問十二　傍線部12「さればうき名をもとどめじと詠めるなり」とあるが、どのような解釈を行ったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　恋人にも逢わず世間からも離れて、悪い評判を払拭してしまおう。
b　世間のことも悪い評判も気にすることなく、恋人に逢いに行こう。
c　恋人に逢うのはもうやめて、世間体や悪い評判を修正してゆこう。
d　恋人との関係も世間体も、もうこうなったら修正のしようがない。

問十三　Ⅰの歌について、正しくない説明をしているものを次の中から一つ選べ。

a　「あふみの海」は近江国の琵琶湖のことで、「君」と恋人同士であることを言っている。

b　「海へた」は「沖つ波」と対になっていて、海岸近くの浅いところを言っている。

c　「人知る」の人は恋人であるが、「知る人もなし」の人は世間の人を指している。

d　「君を措(お)きて」は「沖つ波」の沖に導かれ、「君」への深い愛情がこめられている。

問十四　Ⅱの歌について、正しくない説明をしているものを次の中から一つ選べ。

a　「何せむに」は、一体何のために、の意で、反語に使われている。

b　「へた」は「沖」と対になっていて、海岸近くの浅いところを言っている。

c　「みるめ」も「玉藻」もここでは海藻の一種としての意味を持っている。

d　「思ひけむ」は「何せむに」と係り結びの関係になり、連体形である。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

沙門達多発レ塚ヲ取レ甎、得二一人ヲ以テ進ム。時ニ太后与二明帝一在二華林都堂一ニ、以テ為シ二妖異一ト、謂ヒテ二黄門侍郎徐紇一ニ曰ハク、「上古以来、頗ル有二此事一ヤト否」。紇曰ハク、「昔魏ノ時発レ塚ヲ、得二霍光女婿范明友家奴一ヲ。説キ二漢朝ノ廃立一ヲ、与史書相符。此不レ足レ為レ異ト也」。后令三紇ヲシテ問ハ二其ノ姓名、死来幾年、何所飲食一。死者曰ハク、「臣姓ハ崔名ハ涵、字ハ子洪、博陵安平ノ人也。父ノ名ハ暢、母ノ姓ハ魏。家ハ在リ二城西ノ準財里一ニ。今満二十七、在地下十有二年。常ニ似テ二酔臥スルニ一、無シ所レ食スル也。時ニ復タ遊行シ、或イハ遇ヒ二飯食一ニ、如クタルガ似二夢中一ニ、不ト二甚ダシクハ弁了セ一」。后即チ遣ム下門下録事ノ張秀携ヘシテ詣ラセ二準財里一ニ、訪ハ中涵ノ父母ヲ上。果シテ得タリ二崔暢、其ノ妻魏氏一ヲ。秀携ヘ問ヒテレ暢ニ曰ハク、「卿ノ有ルヤ二児死スルコトヤト一否」。暢曰ハク、「有リ二息子涵一、年 A 而死ストト」。秀携曰ハク、

「為人所発。今日蘇活在華林園中」。暢聞 B 曰、「実無此児、向者謬言」。秀携還、具以実陳聞。后遣秀携送涵回家。

（楊衒之『洛陽伽藍記』）

〈注〉○沙門―僧侶。　○甎―墓に用いられたレンガ。　○太后―北魏の宣武帝の妃で、孝明帝の母。　○明帝―北魏の孝明帝。　○華林都堂―洛陽の華林園内にあった役所。　○黄門侍郎―官職名。　○頗―文末の「否」と呼応して疑問の意を表す。　○魏―三国時代の魏。　○霍光―前漢の将軍。　○博陵安平―河北省の地名。　○城西―洛陽城の西方。　○弁了―区別する。　○門下録事―官職名。

問一　傍線部1「一人」に該当するものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　死者　b　家奴　c　秀携　d　女婿　e　沙門　f　徐紇　g　崔暢

問二　傍線部2「与史書相符」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　歴史書に記されている内容とぴったり一致した。

b　木簡など歴史的な文献に書いてある内容より詳しかった。

c　歴史書や木簡と密接に関係していた。

d　歴史書の内容と似たりよったりであった。

問三　傍線部3「来」と同じ意味で用いられた熟語として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　来世　b　去来　c　爾来　d　由来　e　来迎

問四　傍線部4「何所飲食」に対する回答として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　いつも酒に酔っていたので何も食べる必要はなかった。

b　食べたのか食べないのかはっきりとはしなかった。

c　時々さまよい歩いてご飯を食べたりした。

d　夢の中で物を食べはしたが実際には食べなかった。

問五　傍線部5「為人所発」の訓読として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　ひととなりしょはつたり

b　ひとのあばくところとなる

c　ひとのためにはなたる

d　ひとたればひらくところとなる

問六　傍線部6「向者謬言」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　運命にさからう人は誤りを犯しています。

b　この子に向かう勇気はありません。

c　今後は語弊があって申せません。

d　さきほど述べたことは間違いです。

問七　傍線部6「向者謬言」と述べた理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　息子が他人に迷惑をかけると思ったから。

b　世の中のことが何もかも信じられなくなったから。

c　息子のことがおそろしくなったから。

d　皇帝の威勢におそれをなしたから。

e　国家から嫌疑をかけられると迷惑であるから。

問八　空欄Aに補充する漢数字として、もっとも適切なものを考え、十の位はⅠより選び、一の位はⅡより選んで答えよ。

Ⅰ　a　十　　b　二十　　c　三十　　d　四十

Ⅱ　a　二　　b　三　　c　四　　d　五

問九　空欄Bに補充するものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　驚怖　　b　随喜　　c　悲嘆　　d　侮蔑